

豊庄だより



第 528 号 2018 年 8 月 13 日

8 月の新聞やテレビは戦争と平和の問題について様々な角度から論評をしています。先週豊前市の中学校で、戦争の被害と加害の問題について話したその日（8 月 6 日）、毎日新聞の朝刊に次のような記事が載っているのを見てびっくりしました。

福岡市早良区南庄 2-26-13
社会福祉法人林生会豊庄保育園
園長 西尾 達

余録 13 年前に亡くなった広島原爆詩人、栗原貞子の作品「ヒロシマというとき」は…

▲13 年前に亡くなった広島原爆詩人、栗原貞子の作品「ヒロシマというとき」は今こそ多くの人に読んでほしい。「<ヒロシマ>というとき <ああ ヒロシマ>とやさしくこたえてくれるだろうか <ヒロシマ>といえば<パール・ハーバー> <ヒロシマ>といえば<南京虐殺>……」▲朝鮮半島が非核化に向かうかどうかの正念場だ。日本も北東アジアの平和を真剣に目指すなら加害の歴史とも向き合わなければならない。それは一部の人と言う自虐史観ではない▲原爆投下で戦争を終わらせることができた。そう考える海外の人に広島、長崎の現実をわがことのように受けとめてもらいたい。栗原の詩はこう終わる。「<ああ ヒロシマ>とやさしいこたえがかえって来るためには わたしたちは わたしたちの汚れた手を きよめねばならない」▲広島は、あの日から 73 回目の夏を迎えた。2 年前には当時のオバマ米大統領が広島を、安倍晋三首相がハワイ・真珠湾を慰霊のために訪問した。いつかアジアの首脳同士で実現できないか▲被爆した人が避難した地下室での出来事を基に栗原は詩を書いている。産気づいた女性を重傷の助産師が命がけで出産させた。「かくてあかつきを待たず産婆（さんば）は血まみれのまま死んだ。生ましめん哉（かな） 生ましめん哉 己（おの）が命捨つとも」▲絶望の中に一筋の光を見た人が世界にも多くいるはずだ。だから互いの痛みと希望を分かち合える時が来るのではないか。「ヒロシマというとき」はそう語りかける。（毎日新聞朝刊 2018 年 8 月 6 日）

中学校の平和授業の最後に話したのが、この栗原貞子さんの「ヒロシマというとき」でした。同じ日の新聞にこうした記事が載っているのを知り、日本のメディアもようやく加害の面から発信するようになったのかと思いました。さて、この「ヒロシマというとき」についてですが、栗原さんは戦争の問題を取り上げるとき、被害の体験だけでなく、日本が他国への加害行為について考えなければならないと訴えています。そして、「ヒロシマといえば ああヒロシマと やさしいこたえが かえって来るためには」二つのことをしなければならないとも詩の中で言っています。それは、「捨てた筈の武器を ほんとうに捨てなければならない」、「異国の基地を撤去せねばならない」です。この詩が発表された 1972 年です。朝鮮戦争以降、日本は米ソの対立の中、在日米軍の駐留、再軍備と、平和国家の建設とは逆の方向を歩み始めました。1965 年から始まったベトナム戦争に日本から爆撃機が飛び立ちます。栗原さんは、再び日本は加害者になってしまっていると「ヒロシマというとき」の詩にこめました。

右に挙げた本は、最近発行されたノンフィクション作家梯久美子さんの『原民喜 死と愛と孤独の肖像』（岩波新書）です。原民喜は 1905 年広島市生まれの作家・詩人、疎開先の広島で被爆。代表作は『夏の花』で中学校の教科書にも掲載されました。私は彼の作品の多くは読んでいませんが、今回出版された本は、この夏の必読書と思っています。

